

# 週刊センターニュース No.140



第140号(2007年1月8日)毎週月曜日発行  
発行: 金沢大学 大学教育開発・支援センター  
URL: [http://www.kanazawa-u.ac.jp/faculty/daikyou\\_rche/index.htm](http://www.kanazawa-u.ac.jp/faculty/daikyou_rche/index.htm)

## 共同学習会のご案内

### 第140回共同学習会

\*角間キャンパスと鶴間キャンパスを双方向遠隔授業システムで結んで行います。

日時: 2007年1月11日(木) 16時30分~18時  
場所: 角間キャンパス総合教育棟北棟D14講義室 および  
鶴間キャンパス医学部保健学科5号館5104教室

テーマ: 「大学における基金創設等による外部資金獲得について: 他大学の事例に学ぶ」

発表者: 岩本健良(文学部)

趣旨: 「私立大学はもとより、他の国立大学法人においても、同窓生や企業、現元教職員、市民あるい

は在学生の父母等から広く篤志の寄付を集め、経済的に恵まれない学生への奨学、サークル活動や研究の支援、図書の実質、施設の改善等に活用する組織体制が構築・強化されている。しかし、金沢大学では、教員には外部資金獲得を訴えながら、全学レベルでは対象限定の「国際交流」後援会があるのみで、組織的・包括的な募金体制はいまだ構築されていない。大学財政が厳しさを増す一方、団塊世代が大量退職する「2007年問題」を控え、体制作りが急務である。他大学のさまざまな具体例を紹介するとともに、金沢大学における受け皿体制作りを提言する。

(なお、より充実した報告とするために、事前に報告者 iwamoto@kenroku.kanazawa-u.ac.jp 宛に情報やご意見、アイデアなどをお寄せいただければ幸いです。)

### 第141回共同学習会

日時: 2007年1月18日(木) 16時30分~18時

場所: 角間キャンパス総合教育棟2階大会議室

テーマ: 「今年度の大学・社会生活論(環境教育)を振り返る」

趣旨: 今年度から開講が始まった大学・社会生活論の環境教育の授業担当者にお集まりいただき、今年度の授業を振り返り、来年度に向けた改善点等を議論する。学生の出欠管理など、環境教育の授業内容ばかりでなく大学・社会生活論の授業全体に関わる課題等についても議論したい。

## 第3回専門分野別教育開発セミナー「科学リテラシーと理系導入教育」

### 報告1

12月11日、当センター主催で第3回専門分野別教育開発セミナーが開催された。学内外より50名近い参加者を得て、4つの講演に基づき「科学リテラシーと理系導入教育」をテーマとして、活発な議論が行われた。大学全入時代に入った今、国立大でも学生獲得への危機感から様々な学生募集戦略が実行に移されている。(広島大、立命館大、九州大、東大の事例について報道されている。

<http://www.mainichi-msn.co.jp/shakai/edu/daigaku/news/20060608ddm002040018000c.html>)しかし問題は、高校までの多様な学習履歴を持ち、学力格差が拡大した学生集団に対して、従来通りの教育内容で対応できるのか、いかに教育内容を再編すべきかである。今回のセミナーでは理系基礎教育に限定したが、講演、議論を通してこの問題がいかに難しいかを痛感した。講演において北海道大学の事例が紹介され、また信州大学の事例もパネルディスカッションにおいてその概要が紹介された。共通するのは、高校と大学の橋渡しも含めた理系基礎教育の教育内容についての検討の結果を、全学的な共通教科書にまとめあげようとする動きである。以下に、北海道大学の事例を紹介する。

セミナーではまた、本学の3人の先生方に講演をお願いした。その概要とともにパネルディスカッションの内容については改めてセンターニュースで報告する予定である。本学では全学的な動きにはなっていないが、学部レベルあるいは個々の教員のレベルで上記問題への対応が行われている。本セミナーのテーマとして「科学リテラシー」を入れたのは、高度科学技術にさらされ、理系、文系を問わず自分自身でその真偽を判断できる能力が求められる現代において、科学リテラシーの重要性が今まで以上に増すと思われることと、文系学生を対象とした本学一般科目での多くの教員の教育内容、方法についての工夫が上記問題へのヒントを与えると考えたためである。筆者も遅ればせながら来年度通年の一般科目を開講して高校と大学の橋渡しとしていかなる理系基礎についての教育内容が必要かを考えてみるつもりである。本学でも理系基礎の教育内容についての組織的な議論が早急に求められる。

北海道大学の2006年問題への対応について大学院理学研究院教授の小野寺彰先生に紹介していただいた。ご専門は誘電体の固体物理学である。北海道大学では、理系基礎、特に物理については個々の教員レベルで従来より高校での未履修者向けにリメディアル教育を行っていたが、カリキュラムで組織として対応せざるを得ない状況に来ているとの認識のもと、2000年ごろから検討が始まった。北海道大学では学生の学力格差の状況は2008年よりさらに深刻な状況になると予想し、以下の対応をさらに整備するとのことである。

北海道大学では、農学部、水産学部など生物系の学部では5~6割の学生が物理を高校で履修していない。また、多くの学生を抱える工学部の物理系学科では物理教育をいかに立て直すかは切実な問題となっている。昔ながらのやり方はもう通じない状況に来ていると指摘された。

物理を例として北海道大学の対応を紹介された。一言でいえば教育内容の均質化である。昨年度より秀を含む5段階評価とし、GPAを全学に展開した。その結果はHPで公開され、極端に甘いまたは厳しい成績をつけた教員には文書で理由を述べてもらうこととした。

教育内容について全学的なWGで検討し、同時にカリキュラムを整備した。個々の教員による教育内容の相違をできる限り少なくするために、検討に基づく共通教科書が作成されている。物理については今年度より専門系と準専門系とに分けられた。各学部に対してどちらかのコースを選択してもらい、結果として理学部と工学部応用物理学科のみが専門系を、その他の理系学部、学科は準専門系を学生に履修させることとした。準専門系物理では共通教科書を2冊用意し、シラバスも統一した。授業に使うパワーポイントファイルを担当教員に配布し、それを基に各教員は自分なりの授業にアレンジする。

準専門系物理の教育内容については、物理の授業が一番難しい水産学部を対象とするパイロット授業で平成15年度から検討が進められた。60分の講義と30分の演習とからなり、物理現象のアニメーションの活用や演示実験なども含まれている。

専門系、準専門系物理とともに入門コース「入門物理学」が今年度から設けられ、高校未履修者や文系の学生を対象とする。内容は、力学の基礎と現代物理学、量子力学の入門的なものである。教科書は作成されていないが、基本となる内容が担当教員にCD-ROMで配布されている。

北海道大学の取り組みは、一つの方向を示しており、その是非について検討に値すると考えられる。

(文責 大学教育研究開発部門 西山宣昭)